

巻頭言

跛行的畜産経営

私はふとこんな話を思い出した。

父親から今日は雨が降るから高下駄をはいて行けと云われたので、息子は高下駄を出していると、側から母親がいや今日は曇っているけれども、きっとお天気は良くなるから日和り下駄をはいて行った方がよいでしょう、と云われて親孝行で知られている息子はどちらの話を聞いてよいか困ったあげく、高下駄と日和下駄を片方ずつはいて行ったと云う話しである。

両方の話を聞いて、両方の顔をたてて、両方の云い分を半分ずつ実行したとすると、出来上がったものは中途半端なもので結局困るのはその本人である。

採択決定は本人がするのであって、本人の納得の行く方法を選べばよいわけである。然し決定は自由であっても、決定までには充分に人の意見を聞き、自分でも研究し、先の先まで見通して、自分に最も都合の良い線を出すことが大切である。

畜産の経営もそれでよいのではなかろうか。様々な方面から研究をして採択した以上は他人を対象にしないで、自分の経営に最も適した方法で、一番利益の挙る面に向って進めば良いと思うのである。一度決定した線は時の流れに煩らわされることなく、永い眼で収支のバランスを見て一時的な価格の波に左右されないで進んでほしいものである。

和牛を飼い乍ら乳牛を入れ、鶏の景気がよければ又鶏を入れる。近所で豚を飼い出せば又豚を入れると云った様な事で動物園の様な農家がある。人から動物園であるとひやかされると、いや自分は立体農業をしているのであると逃げ口上を唱える。

立体農業も洵に結構である。然し最近の農業経営は次第に事業化の形に進んでいる。人手不足は深刻になり、雇傭労力は農村に行くほど不足している現状である。労力の分散より、労働の集中化を図り経営の主軸を中心に能率化を考え然も所得倍増を計らなければならない時代である跛行的畜産経営にはもうおさらばを告げたいものである。